
バカとボカロと天才化学者

創造

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとボカロと天才化学者

【Nコード】

N21930

【作者名】

創造

【あらすじ】

とある研究室で、奇跡が起こった。

出会えるはずのない2人がであった瞬間であり、不可能が可能になった瞬間である。

VOCALOIDとバカテスのコラボ作品です。コラボが苦手な方、性格が合っていないのが嫌だという方は即刻退場してください。OKな方はどうぞ。

ブローグゝ瞬間ゝ（前書き）

スランプ脱出を目指します！

ブローグ 瞬間

~~~~~SIDE???~~~~~  
ここはとある地下室の1部。

何処かの実験室を思わせる雰囲気部屋である。

?「やっと……やっと完成した!」

そう言った男はガラスの向こうにいる6人の男女に目を向ける。

それぞれの体には大量のコードが差し込まれている。

?「さあ、起動させよう……『VOCALOID』を……」

そう。彼ら6人……いや。6体はロボットである。

姿は完全に人間そのもの。

だけど、腕も、足も、頭も、体も。そして……『心』も全て機械で  
できている。

本来ならば、現実には存在してはいない……

いや、存在してはいけない存在である。

完全なる2次元<sup>バーチャル</sup>の世界の者だから。

0と1で作られている2次元の存在。それが『VOCALOID』

である。

？「さて……始めよう。」

男はすぐ傍にあるパソコンのキーボードをかなりのスピードで打ち始めた。

画面上ではウィンドウが現れてはすぐ消える。

そして、それが終わったときに残ったのは6つのウィンドウ。

それぞれのには『miku』『len』『lin』『kaito』『luca』『meiko』と文字がある。

やがてそのウィンドウも消える。

？「さて……目覚めるときだよ。ミク、レン、リン、カイト、メイコ、ルカ。」

ガラスの向こうの6人に語りかける男。

それに反応するかのように目を開ける緑の髪の女性。

それに続いて金髪の男女、青い髪の男、茶髪の女性、桃色の髪の女性が目を開ける。

？「ここは……どこですか？」

緑色の髪の女性が喋りだす。

？「初めまして……と、言つべきかな？初音ミクちゃん。」

初音ミクと言われた女性は驚いた顔をして男を見る。

ミ「え！？何で私の名前を知ってるんですか！？」

？「クスクス……僕は君の『マスター』さ。」

ミ「マスター！？え？何ですか！？こつちには来れないはずだし、向こうにも行けない筈なのに……」

『マスター』という単語にかなりの衝撃を受けたようで、何かを考えているのか、ブツブツと独り言を言い始める。

？「それはね、僕が君たちの体を作って、プログラムを埋め込んだ。それだけさ。」

ミ「そうですか……所で、マスターの名前は何ですか？」

？「あ、そういえば言つてなかったね。僕の名前は なみかぜじゅう 波風愁。シュウでいいよ。」

ミ「分かりました。マスター認証としておきます。」

愁「いきなり機械っぽくしないでくれないかな……さっきまでとギヤップがあるからさ……」

ミ「あ、分かりました。」

程なくして、他の5体も喋りだした。

？「あれ〜？知らない天井だ〜」

？「そういう発言はベタ過ぎるよリン……」

？「あはははは〜いいーじゃないレン。こついうの一回言ってみたかっただよ。」

？「はあ〜。もつとこの状況がおかしいとか思わないのか？」

？「うん。」

なにやら漫才のようなことを始めた金髪の背の低い男女。

リンと呼ばれた少女はこの状況をなんとも思っていないようだ。

レンと呼ばれた少年は突っ込みを入れつつも呆れている。

？「う〜ん。アイスがいつぱい…むにゃむにゃ「何寝てんのよ！」  
(ゴスっ)グフォアアッ！！」

青い髪の少年は何故か目を開けたまま寝ているようで、茶髪の女性が腹を殴って起こした。

？「いって〜〜！！何すんだよメイコ！」

？「うるさい！カイトが寝ているのが悪いのよ！」

？「理不尽すぎるだろ！」

？「まあまあ、2人とも喧嘩しないで。」

？「なんでルカは平然としていられるの!？」

？「そりゃあ、皆居ますし。住めば都とか言うじゃないですか。」

？「そうだぞメイコ。問題は慣れるまでだな。」

？「あんたは黙ってて!（ブスツ）「ギャアアアツ!目が!目がああああ!」直せるからいいでしょ。潰しても。「怖い事言っ  
なよ!」もう一発逝く?「字が違うし!」「まあまあ落ち着いて。  
メイコちゃんもやろうとしないで。」「うゝん……無理!」

またしても漫才のようなことを始めた男女をを喧嘩と思つて抑える  
桃色の髪的女性。

カイトと呼ばれた男性は腹を抑えつつももう片方の手で目を押さえ  
ている。

メイコと呼ばれた女性は指をチョキの形にしてまたやろうとしてい  
る勢いでいる。

ルカと呼ばれた女性は行こうとするメイコと呼ばれた女性を抑え  
ている。

愁「皆個性豊かで面白いね。作つてよかったよ。」

ミ「どうしてですか?」

愁「毎日の生活が楽しくなりそうだからさ。それに、家族ができた

しね。」

ミ「え？」

愁「君たちは、今日が誕生日さ。ハッピーバースデー、ミク。」

ポカンと口をあけたままのミクを面白そうに笑っている愁。

出会えるはずのない2人が出会った瞬間。

不可能を可能にした瞬間。

天才科学者の最高傑作が生まれた瞬間。

そして、新しい家族ができた瞬間。

愁「……………これからよろしくね。皆。」

## 第1部　～日常～

愁がVOCALOIDを作ってから数ヶ月。

彼は文月学園2年生となった。

もちろん、彼がVOCALOIDを作っていたのは誰にも知られていない。

寝る間も惜しんでいたので暇ができていたが、テレビを見てたとかゲームしていたとかでごまかしてきている。

そして、彼は少しアニメっぽいのも作っている。

空中に現れるモニターだとか。

透明人間になれる薬だとか。

まあ、ほとんどが偶然できたものだが。

それについては後に。

7:00

愁「zzzzzz……（ジリリリリリ！）……朝か。」

目覚まし時計を止めて制服に着替えて1階へ降りる。

キッチンではルカが料理をしていて、リビングではリンとレンが遊んでいる。

メイコはソファで新聞を広げて読んでいて、ミクとカイトはまだ寝ている。

これが日常生活のいつもの朝である。

ミ「ふあゝあ……おはようございます、愁さん。」

ミクが起きてきた。眠たそうな眼を擦って挨拶をしてきた。

愁「おはよう、ミク。」

笑って挨拶をする愁。

ル「あ、ミクちゃん、もうすぐ朝ごはんできるから、カイト君を起こしてきて。」

ミ「はい。」

ミクが上に行ってから1分後。

なにやら上から聞こえてきた。

ミ（起きてくださいカイトさん!!）

カ（zzzz……zzzz……）

愁「……………メイコ。」

メ「……分かってるわよ。」

そっいつてメイコも2階に行く。

メ（起きなさいカイト！）

カ（zzz……zzz）

メ（はあ……せいやっ！）「ゴスッ」

カ「グフォアアアッ！！！！」

上で酷いことが起こっているが全員何もないといっているよう普通にいる。

……… 毎回毎回ベッドに血がついているのは置いておこう。

3分後、ミクは来たままの状態で、メイコは頬と手に赤い液体がついている。カイトは腹を押さえながら涙目になっている。

やりすぎだと思うがこれも置いておこう。

それで皆がそろったところで朝食。

リ「そっいえば、愁兄は今日で2年生だっけ？」

愁「うん。そっだよリン。」

レ「ま、兄さんはAクラス確定でしょ。」

ル「だいぶ熱心に勉強していましたし、主席かもしれませんね。」

メ「よし、今日はお祝いにしましょう！」

ミ「気が早すぎますよメイコさん。というか、お酒が飲みたいだけでしょ？」

メ「そのとおり！」

7：30

愁「それじゃ、いつてきまゝす」

「「「「「いつてらっしゃい」「」「」「」

いつもの光景。だけど、嬉しい。

皆で笑い合える。これが今の日常であり、幸せでもある。

1年以上前はこんなことありえなかった。笑えない生活で、いつも孤独だった。

だけど、今は違う。

こうして皆が、家族が居る。

些細なことでも、皆で居るから、笑っていられる。

それが、今の僕の幸せです。

これから、これが一生続きますように……

愁「さて、今日の夕飯はほんとに豪華にしよう。

……皆が笑ってくれるようにね。」

## 第2部 く学園生活く

愁たちの住む家から歩いて20分ほどで文月学園に着く。

桜の木が並ぶ通学路をゆっくり歩いていく愁。

それは傍から見たら様になるような雰囲気。

愁「西村先生、おはようございます。」

？「ああ、おはよう。」

門の前にいたのはハードボイルドな雰囲気で肌が黒い西村先生。

トリアスロンが趣味ということ、冬でも半袖でいることから鉄人とよばれ、生徒からは親しまれて（？）いる。

西「ほら。クラス分けの封筒だ。」

そう言つて1つの封筒を渡してくる。封筒には大きく「波風 愁」と書かれている。

愁「ありがとうございます。」

それを受け取って開けようとするが、なかなか開かないようだ。

愁「それにしても、何でいちいち封筒で1人1人に渡すんですか？  
掲示板に張り出したほうが楽だと思っんですが。」

西「俺もよくは知らない。波風はどう思っただ？」

愁「うーん。多分プライバシーの保護とすばやくするためですかね。」

それっぽい理由で答えた愁。

西「なるほど、理由は何だ？」

愁「プライバシーの面ではFクラスの人をバカにする人が出てきま  
すし、すばやくするための方では、Aクラスから見ていくとHRに  
遅れるかもしれない人が出てきますし。」

西「吉井か。」

愁「はい。」

即答だった。友人を教師と一緒に批判する。嫌な光景だろう。

愁「ふう、やっと開いた。クラスはつと………OTL」

いきなり膝をついた愁。手には大きく『F』と書かれている紙があ  
った。

西「ああ。全部の解答用紙に名前が書いてなかったぞ。よって点数  
は0。試召戦争にはいきなり参加は無理だな。」

愁「不幸だ……」

西「まあ、めげずに頑張れ。」

愁「はい……………」

相当落ち込んだ様子で校舎に入っていく。

すると、制服のポケットから音楽が鳴った。

愁が取り出したのはライターほどの大きさの物。

ボタンを押すと、目の前にモニターが出てきて、リンが写っていた。

リ「愁兄〜ど〜だった〜」

愁は無言で紙をモニターの前に出す。

リ「え！？Fクラス！？どーしょドーシヨ……………」  
「落ち着いてリン。」  
え？」

あたふたしているリンを愁が止めた。

愁「たぶん明久君たち…………もとい僕の友達はいると思うから。」

リ「そっか〜。じゃあみんなに伝えるね。」

愁「うん。夕飯は豪華にするよ。」

リ「やったー！！オレンジもいいかな！」

愁「ははは、いいよ。買ってくるから楽しみにしてて。」

リ「はい！」

モニターを消すとFクラスを探した。

愁「…………… 此处、だよね。」

2-Fと書かれた標識は今にも壊れそうで、ドアの替わりに障子があり、それもボロボロである。

愁「…………… 入ろう。こんなところに居ても意味ないしね。」

障子を開けるとひどい有様だった。

腐った畳。

割れた窓。

机の代わりにちゃぶ台。

所々にクモの巣がある。

愁「…………… いくらなんでも酷すぎる。」

？「お、愁じゃねえか。どうしたんだこんなところで。」

愁「あ、雄二君。」

教卓に居るのは友達の坂本雄二君。

赤いたてがみの様な髪の毛に、少しツリ目で身長もだいぶ高い。

昔は神童ともよばれていたほどだが、今は面倒だとかで勉強はあまりやっていないそうだ。

愁「雄二君こそ、教卓に立って何をしているの？」

雄「教師が遅れているから代わりに立ってみたんだ。一応このクラスの代表だからな。」

愁「へえ、雄二君が代表か。」

雄「それより、何で愁がこのクラスに居るんだ。」

愁「テスト全てに名前を書き忘れててね。こうなったんだよ。」

雄「そうか。こいつはいい戦力になるな……」

顔に笑いの表情を浮かべる雄二。きっと何かやらかす気だろう。

愁「そういえば、席はどうなってるの？」

雄「自由席だそうだ。」

それでいいのかと思うが置いておこう。

愁は窓側の席についた。

少しして、教室のドアが開いた。

？「すみません、ちよつと遅れちゃいました」

雄「早く座れ！このウジ虫野郎！」

言いすぎだと思いがスルーしよう。

入ってきたのは原作の主人公、吉井明久。

薄い茶髪と目で、意外と女装が似合うそうだ。

彼は観察処分者で、召還獣が物に触れる特殊なものとなるが、フ  
イードバックや教師の手伝いなどをさせられる。

少ししゃべっていたあと、やっと先生が来た。

黒板に名前を書こうとしていたが、チョークすらないようだ。

これじゃあ授業ができないだろと思ったのは何人もいるはずだ。

？「…福原 慎です。よろしくお願いします。」

ヨレヨレのスーツを着ている先生だ。

アニメでもあまり出番がなく、ナレーションになってしまったかわ  
いそうな先生。

この先生の存在を何人も忘れているだろう。

福「卓袱台、座布団、え——…不備があれば申し出てください。」

不備しかないだと内心突っ込みを入れる愁。

F1「せんせー。俺の座布団綿がほとんど入ってないでs「我慢してください。」」

F2「先生。俺の卓袱台の脚が折れてまs「木工用ボンドが支給されているので自分で直してください。」」

F3「センサー。窓が割れてて寒いでs「セロハンテープとビニール袋を頼んでおきます。」」

此处は本当に学校なのか！？と思いつつも自己紹介へ。

？「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。1年間よろしく頼むぞい。」

友達の秀吉君です。

肩にかかる程の茶髪と、女の子と思うような中性的な顔。

女の子みたいな容姿のせいで何人にも告白されているそうだ。

？「……………土屋康太。」

口数が少ないのは土屋康太君。

皆からはムツツリー二と呼ばれています。

学園内には彼が撮った写真を売る「ムツツリ商会」があるそうです。

というか、商会で名前すぐにはれるんですけどね。

？「島田美波です。ドイツ育ちで日本語は読み書きが苦手です。趣味は吉井明久を殴ることです」

趣味以外は普通の島田美波ちゃん。

赤い髪のポニーテールと黄色いリボン、が特徴的です。

よく明久君に関節技やプロレスの技をかけているのを見ますが……あれって趣味だったんですか……

中略

明「吉井明久です。気軽にダーリンと呼んでくださいね」

F『ダーリーリーーーーン!!!!!!!!!!』

うえ……気持ち悪くなってきましたよ……

愁「先生……気分悪くなってきたんで保健室行ってきます……」

愁が教室を出ようとするところとちょうど入ろうとしてた人とぶつかった。

？「あ、すいません。」

愁「いえ。こっちが言うべきですよ。僕に非があることなんですから。」

F『総員狙え！！』

何でか怪しいフードを被ったFクラスの皆がこっちに向けてカッターやコンパスを投げようとして来た。

愁「わわわ、危ないですよ。それに投げたらこの子に当たっちゃいますよ。」

F4「卑怯な！姫路さんを解放しろ！」

愁「いやいや解放って、大げさですよ。捕虜じゃないんですし。それに何で狙うんですか？」

F『うらやましいからだ！』

愁「はあ……改めて保健室行ってきます。」

そう言っただけ保健室に歩いていった。途中「逃がすな！絶対に捕らえるんだ！」『裏切り者に裁きの鉄槌を！！』と聞こえたため、急いで向かった。

愁「はあ……疲れるけど、退屈しない1年間になりそうです。」

楽しみにしてますよ？雄二君。」

### 第3部　く戦争の引き金く

保健室で5分ほど休んでから教室に戻った愁。

教室の前で明久君と雄二君が話していたと思ったらずぐ入った。何を話していたんでしょうか。

後ろから福原先生がボロボロの教卓を持ってきた。

壊れたのでしょうか……せめて普通の持ってきてほしかったです。

気にしつつも教室に入って席に座った。

福「保健室に行っていたのでいなかった、波風君。お願いします。」

愁「はい。」

何て言えばいいんだろう？まあ、普通で良いか。

愁「波風愁です。趣味や特技は開発と研究。得意教科は科学です。1年間よろしくお願いします。」

こんなものでしょう。さっきの吉井君よりはマシです。

福「坂本君、君が最後です。代表なので前に来てください。」

雄「了解」

雄二君、きつと何かたくらんですね。

雄「俺がクラス代表の坂本雄二だ。代表でも坂本でも自由に呼んでくれ。」

さて皆に一つ聞きたい。」

少し間を空けて雄二君がまた話し出す。

雄「Aクラスは冷暖房完備の上に座席はリクライニングシートだそうだが——不満はないか？」

F『大有りじゃあつ!!!!!!』

おお、Fクラス魂の叫びですね。ここまで1つになれるんですね。さすが雄二君です。

いろんな所から不満の聲が上がっています。

雄「俺たちFクラスはAクラスに対し、『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う！」

一気に静かになりましたね。まあ当たり前でしょうけど。

「無理だ」とか「できるわけない」と言う声ばかりです。

ここで試験召喚戦争について説明しましょう。

ここ文月学園ではテストの点数に上限がありません。

1時間以内ならどれだけ問題を解いても良く、その点数が召喚獣の

強さになるわけです。

2年生からは振り分け試験の点数に応じてクラスが決まります。

Aクラスは250点ぐらい取る人が何人もいるに対して、Fクラスは70点が精一杯なくらいでしょう。

Aクラス1人に対して3〜4人か、それ以上でもかなわない時もあります。

つまり戦力の差が大きすぎて、真つ当な戦いにならない訳です。

だから無理と思うのが当たり前でしょう。

下位のクラスが上位のクラスに勝つと設備が交換できますが、仕掛けたほうが負けると設備が1ランク下がります。

BならCに、EならFになります。

だからあまりやりたくないでしょう。これ以上悪くなることがありますし。

雄「根拠ならあるさ。このクラスには勝てる要素がある。それを今から説明しよう。」

やる気ですね。しかも近いうちに。

雄「おい康太、いつまで姫路のスカートを覗いてるんだ。」

康「……………（ブンブン）」

？「はわっ！？」

ああ、さっきぶつかった子ですか。姫路さんって言うんですか。たしかAクラス確実の成績だったはずですが……まあ味方ですから心強いです。

何故かルカとキャラが被りますね。

雄「土屋康太。こいつがあ有名なムッツリー二だ。」

康「……………（ブンブンブン）」

首が千切れそうなほど横に振って否定しています。見てると面白いですね。

雄「姫路のことは皆よく実力を知ってるだろう。」

クラス中から「おお……」と声が上がります。中に猛烈なラブコールを送ってる人がいますが……

雄「それに木下秀吉だっている。」

秀「ワシもか？」

そういえば双子の姉がAクラスでしたっけ。演劇部のホープと言われていますが、どれほどでしょうか。ミク達と一緒に歌わせてみたいです。

雄「当然、俺も全力を出す。」

坂本君も神童と呼ばれていた程なので、がんばればAクラス並でしょうね。

雄「それに吉井明久だっている。」

クラス中が静かになりました。オチ扱いされて明久君が泣いています。

明「僕は普通の人なんだから普通の扱いを——って何で僕をにらむの!？」

ひどい扱いですね。雄二君らしいですが、さすがに酷すぎでしょう。

雄「知らないなら教えてやる。こいつの肩書きは『観察処分者』だ!」

言われましたね。誰かが「バカの代名詞だろ」といつてから雄二君が暫定しました。

哀れですね。吉井君がかわいそうに思えてきます。

雄「おっと忘れていた。愁。前に出て来い。」

愁「?分かりました。」

何で僕も呼ばれたんでしょうか。理由が分かりません。

雄「こいつは目立たないがAクラス並の実力だ。科学に関しては主席の2倍ほどの点数だ。」

クラス中がまた騒ぎ出しました。目立たないって……酷いですね。お仕置きです。

雄「こいつも要にな——っておい！こっちに向けて銃と剣を出すな——！」

愁「僕へ酷い扱いをした罰です。今もう1人ヨンデキマスカラ。」

雄「分かった！俺が悪かつて「もう遅いです。許しません。」」

さて、誰を呼びましょうか……

雄「本当にすまなかった！！頼む！このとおりだ！」

土下座してきましたね。さすがにやりすぎました。

愁「冗談ですよ。それに顔合わせですから全員呼びますけど。」

雄「全員って……お前1人暮らしたろ？」

愁「後で話します。とりあえず連絡を……」

ポケットからあの機械を取り出す。

モニターを出すと全員が驚いたようだが気にせずに呼ぶ。

愁「誰かいる？」

ル「あ、愁さん。何ですか？」

ル力が出てきました。まとめるのが早いから助かります。

愁「ルカ、学校に皆連れてきてくれる？」

ル「良いですけど……どうしてですか？」

愁「クラスメイトに顔合わせしてもらおうと思ってね。」

ル「そういうことですか。分かりました。」

モニターを切ると再びFクラスの人が怪しいフードにカッターにコンパスに鎌に十字架にライターにポリタンク……って殺す気ですか！？

F1「貴様！今の人は何だ！」

愁「落ち着いてください。もうすぐ皆来ますから。そのときにお話しますから。」

F2「違う！何であんな人と暮らしてるんだ！」

F3「羨ましいじゃないか！」

愁「だからその理由を「失礼しまーす」あ、皆。意外と早かったね。」

レ「皆暇だったからな。むしろ行きたかったし。」

リ「いや〜退屈だったよ〜」

ミ「あはは……まあ、確かに行ってみたかったし……」

ル「皆伝えたらすぐ行くって聞かなかったものですから……」

メ「まーまー。良いじゃない別に。」

カ「そうそう。特にリンとレンがはしゃいでたね。」

それぞれが話し出す。余計に殺気が強まってきましたけど。

愁「クスクス……それじゃあ皆。自己紹介ね。」

ミ「はい。私は初音ミクです。」

レ「俺は鏡音レン。」

リ「私は鏡音リンだよ」

ル「私は巡音ルカです。」

メ「私はメイコ。好きなものはお酒！」

カ「僕はカイト。メイコ。そんな胸張っていえることじゃないだろ。」

それぞれが自己紹介を終えた。（1人呆れて）

愁「この6人は僕が『造った』んだよ。」

F『はあ!?!』

皆やつぱり驚いてるね。さすがにいきなり言われるとそうなるけどさ。

雄「お前、造ったって……こいつらロボットか?」

愁「まあ、そうなりますね。」

明「信じられないよ!そんなロボットいるはずないよ!ド。えもんじゃあるまいし!」

明久君、よく言ってくれましたね……よし。

愁「それじゃあ証拠を出します。カイト、ちょっと来て。」

カ「どうするんですか?」

愁「電源をOFFに。」

いきなりだけどまあいいか。たしかこれだった。

カ「え?ちよつと…ま……って……」

(ピーーーーー)

愁「よし。それじゃあ証拠w「待て待て!!」なんですか?」

雄「死んだのか!死んでるようにしか見えないんだよ!」

愁「電源切っただけですから。よっと……確かここを押すと……」

（バキバキバキ）

愁「よし。これが証拠だよ。」

いきなり前にいる人が機械だけになって皆驚いていますね。

雄「……………すげえな。」

愁「それじゃ、直します。もう一度押してっと……」

（カチャカチャカチャ）

数秒で元どおりになりました。

愁「修復完了！電源ONと」

力「いきなり何するんですか！」

愁「ごめんごめん。ちよっとね。」

力「あれ結構体がだるくなるんですよ！」

愁「え？そうなの？まあ、これからは修理以外はやらなくするからさ。」

力「まったく……」

いきなり元に戻ったので驚いている皆。フリーズしたままに見える

よ。

愁「それじゃあ、雄二君。続きよろしく。あ、皆は帰っていいよ。」

『はい（了解）（分かりました）』

皆はすぐ帰れるからね。鉄人と学園長に後で話そう。

雄「それじゃあ話を戻す。まずは、Dクラスを攻める。開戦は今日の午後にする。皆、覚悟をきめてかかれ！」

F『おおおおおっ！！！！！！！！』

愁「クスクス……さて、始めようか。」

雄二君。楽しみにしてるよ。」

## オリキャラ&腕輪紹介（前書き）

早くも1000pv突破しました！

皆さん、読んでいただいて誠にありがとうございます！

## オリキャラ&腕輪紹介

主人公

名前 ナミカセ 波風 シュウ 愁

性別 男

趣味・特技 開発、研究

点数 4000～5000点 特に科学で2割程取る。

容姿 イメージは『バクマン』のシュージンの青髪&緑眼・眼鏡  
(分からない人は週間少年ジャンプかNHK教育テレビの土曜午後  
6時にやっているアニメを見よう。)

召喚獣装備

○姿 デフォルメされた容姿に白衣。

○武器 メス、鋏、スタンガン、その他諸々。

○腕輪 効果名『セッション』

召喚獣の衣装がヘッドフォン&私服(ジーンズ&ジャケット)になり、武器の代わりにドラムになる。

更にVOCALOIDの6人が出てくる。

ランダムに曲を演奏し、周りに音符を出す。

敵が味方に当たると、それぞれの出した召喚獣によって効果が変わる。

それは以下の通り。

~~~~~効果一覧~~~~~

名前 敵

味方

ミク 点数を5点下げる

点数を10点回復する。

(自分の取った点数より上はな

し。)

レン 点数を8点下げる

武器によって与えるダ

メージを一回につき2点上げる

リン 武器によって喰らうダメージ

を1回につき1点減らす

点数を5点回復する

カイト 2秒間召喚者の命令を聞かなくす
やすくする(反応速度があがる)

3秒間召喚獣を動かす

る

メイコ 3秒間動きを遅くする

5秒間召喚獣の武器を

強化する(戦争1回につき3回ま

で。)

| | | |
|---------|----------------|------------|
| ルカ | 点数を1点ずつ下げる（貫通） | 点数を3秒間の間2点 |
| ずつ回復させる | | |

愁 点数を3点下げる&腕輪を使えな
精密操作可能（観察処分者同様、フ
くする 点数5点回復&3秒間

イードバックなし)

アンケート

早くも1000pv突破しました。

今日は皆さんにアンケートをとりたいと思います。

最近はユーザーじゃなくてもできるので、どしどし書いてください。

それでは、本題です。

この小説のVOCALOIDを増やしたいと思うんですが、

何か要望があるなら書いてください。

何もない場合はがくぽとかにしようと思ってます。（ネタバレ）

知っているのはテト、ネル、ハク、がくぽです。

あまり知らないのも、もしも書く場合は特徴を書いてほしいです。

そして2つ目。

腕輪効果の『セッション』で流す曲をリクエストしてください。

VOCALOID以外でも良いです。

皆さん、どうかよろしくお願いします。

間話　く暗黒料理く

ちよつと飛ばしてお昼ご飯。

姫路さんの弁当イベントです。

本編は回避させますが、もしいったならどうなったかの話です。

それではどうぞ。

~~~~~教室~~~~~

授業が終わって昼休みです。

今日はリンとレンが遊びに来ています。

雄「今日はチャーハンにカレーにピラフにカツ丼にすっかな。」

多いし、ご飯類ばっかだし、ピラフとチャーハンはほぼ同じです。

ぶつちやけ底なしの胃袋ですかね？

おや？姫路さんがみんなを誘っていますね。

あ、そういえば昨日お弁当作ってきてくれる約束でしたね。

リ「姫路おねえちゃんのお弁当ってどんなのだろう？」

愁「さあ？多分まともだと思うから良いんじゃないかな？」

レ「いや、ああいう人に限って酷いんだよ。薬品入れたりしてるかもな。」

愁「それは料理以前の問題だよ……じゃあ、リンは先行つて。レンと一緒に飲み物勝って行くから。」

リ「はい！」

飲み物を買うところは省略

屋上の扉を開けると目に入ってきたのは、

倒れている康太君。

それを見て顔を青くしている秀吉君と明久君。

いきなり倒れたのであたふたしている姫路さん。

口にエビフライを運んでいるリン。直後に倒れた。

愁「……………はっ…リンー！」

倒れたリンに駆け寄るレンと愁。

内部の消化機械を見るため、機械むき出しにして取り出す。

すると、その部分が少し溶けている。

あわててレンに家に電話してもらい、予備のパーツを取り付け、リンはなんとか大丈夫になった。

溶けているところを後日調べた結果、王水が抽出された。

何でエビフライから王水が抽出されたんでしょうか……

あわてている間に明久君が雄二君にお弁当を無理やり食べさせたり、秀吉君がヨーグルトをかき込んで倒れた。

それからリンは1ヶ月ほど、姫路さんに恐怖を抱いて、話をするのを拒んでいた。

#### 第4部　～戦争開始～

昼休みを挟んで午後の授業が始まる時間。

僕は姫路さんと一緒に補給テストを受けています。

実はちょっとシャープペンに改造を加えて早くしてるんですけどね。

愁「先生。次のテスト下さい。」

？「はい、どうぞ。」

ちなみに補給テストを見ているのは今回は高橋先生。

詳しくは知らないのでWiki等で。

姫「先生。次を下さい。」

高「どうぞ。」

実際にテストは無限にあるわけないけどできるだけやる。

~~~~~10分後~~~~~

愁「よし。全教科終わったぞ。」

そろそろ行きましようか。

（ピンポンパンポン）

愁「ん？」

「船越先生、船越先生。2年Fクラスの吉井明久君が体育館裏で待っています。」

（ピシッ）

愁「……………」

姫「……………」

高「……………」

明「須川あああああああああああああ！！！！！！」

あ……………明久君……………君には常識って言うのは無いのかい！？

船越先生のことはw（ry）

愁「……………行ってきます。」

さっきのことは置いておこう。

愁は遊撃部隊で1人にいる。

基本は大体できるから蛇大佐みたいにスニーキングもできるし、変装、変声もできる。

完璧超人だ。

で、今現在いるのはDクラスの下の校庭。

愁「それじゃあ、いきますよ!」

愁がはいっている靴の中にジャンプするとかかなりの高さまでできて、調節も可能な機械がある。

もちろん愁の自作だ。

愁「よつと。」

軽くジャンプしたように見えるが実質4階の高さまで跳んでいる。

そのままDクラスの教室の窓に入る。

幸いDクラスの本隊は廊下に出ている。

チャンスだ。

愁「あれが代表ですね……一気に仕留めます。」

音を立てないように近づいて、後ろからの奇襲だ。

愁「Fクラス波風愁。Dクラス代表平賀君に現代国語の勝負を挑みます。試獣召喚^{サモン}」

平「え?あ、試獣召喚^{サモン}」

代表はいきなりのこと頭が回らず、近衛部隊も呆然としている。

愁「すいません！」

召喚獣が手を振るとそこからメスが20本ほど跳んでいく。

~~~~~現代国語~~~~~

Fクラス 波風 愁

VS

Dクラス 平賀 修斗

376点VS115点

~~~~~

串刺しにされた相手の召喚獣が消えた。

愁「Dクラス代表平賀修斗、打ち取ったりいいいいいい！！！」

F『おおおおおおおおお！！！！』

新学期早々の戦争はFクラスの勝ちで終わった。

愁「でも、ここで終わらないですよね？」

皆の前で言ったじゃないですか。

..... Aクラスに勝てる、勝たせて見せるってね。」

間話　波風家と演劇部

どうも。お久しぶりです。

波風愁です。

何故かこれを言ってくれとカイトから通信が来ました。

何故でしょうか？

……それはともかく、今は全員を連れて演劇部の所に居ます。

なにやら秀吉君が演劇の主役をボカ口の誰かにやらせたいと。

それで決めたのがレンです。

題名は『悪の召使』です。

作者「（完全にパクリです。悪のPさん、勝手に使ってごめんなさい。）」

内容は、中世ヨーロッパ風の物語で、主人公の召使アレン（レン）が王女リリアヌ（リン）の双子で、それを知っているのは主人公と他数人。

王女は自分のことしか考えない悪逆非道の王女『悪の娘』と言われている、民衆に妬み、嫌われている。

後は悪の娘の小説や歌を聴いて考えてください。

今は台詞を記憶させるために一通り読ませている。

僕もちろん参加しています。

「さあ！ 跪きなさい！」

「……死んでください。」

カ「ごきげんよう。リン王女」

ル「それは……タコ！いいえ、それは『とてもすごいタコ』！」

メ「父さん、お酒は飲んでないでしょうね？」

「すごいじゃない！王女の直属の召使なんて！」

愁「僕じゃなくて、僕の子供がね。」

カオスです。

しかも秀吉君が滅茶苦茶面白いです。

演劇バカってこういう人なんでしょうね。

「あはははははははははは！……！」

ん？こんな台詞はなかったはずですか？

秀「うむ。やっぱりレナ役にぴったりのじゃのう。」

まさかの『ひぐらしのなく頃に』ですか！？

……っというか、そんな話リンには過激すぎますよ！

あれ血がめっちゃ出てますから！主人公がヒロイン撲殺しますから！

ミ「愁さーん。終わりましたー。」

愁「おつかれさん。後は秀吉君にチェックしてもらったら？」

秀吉君は台本を全て覚えているようです。

その熱意を勉強に向けてほしいですがね。

で、その1カ月後、1度だけ公演する事になりました。

親の知り合いのTV局の上の人に頼んでcmを流してもらいました。

おかげで人が大勢来ました。ざっと4〜500人ですかね。

もちろん皆やる気満々です。

~~~~~演劇中~~~~~

リ「パンがなければおやつを食べればいいじゃない。」

うん。やっぱり演劇に向いてますね。

レ「なぜ、王女を裏切ったんですか？」

おお、こっちはすごい迫力になります。

ミ「そ、それは『とてもすごいネギ』！」

うん。台本がふざけてますね。会場大爆笑ですよ。

ル「ふふふ……貴方がどうしようと、何も変わらないと思うわよ。」

ル力の雰囲気に合わせています。さすが演劇部。衣装も凝ってますね。

~~~~~そしてクライマックス~~~~~

レ「バイバイ、リリアンヌ。」

リ「嫌！アレン！アレーーーーーー！ー！」

会場のほぼ全員が泣いてますね。僕も泣きそうです。

レ「これで良いんだ。リリアンヌが『悪の娘』なら僕は『悪の召使』だ。誰に何と言われようと、僕が君を守る。そう誓ったんだ。」

本当にいい内容です。やってる側も泣きそうですから。

~~~~~終了~~~~~

部員1「皆様、ありがとうございました。これにて文月学園演劇部 + @の舞台『悪の召使』を終わります。」

この挨拶で会場中から拍手と歓声があがりました。

その数日後、TV局の人に番組に出てみないかと誘われ、出演したのはまた別の時に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2193o/>

---

バカとボカロと天才化学者

2010年11月11日19時01分発行